沖縄社会は日本財産

AMDA活動報告

救える命があればどこへでも

□5□

菅波 茂

血縁共同体

掟・慣習の熟知が不可欠

「なぜ沖縄は世界平和の実現に動くのか」。究極の問いである。では、なぜAMDAは沖縄に協力したいのか。この問いに答えるには、まず「平和」の定義から説明しなければならない。

AMDAの定義は「平和とは今日の家族の生活と明日の希望が実現できる状況」である。今日の生活とは食べることと健康であること、明日の希望とは子どもに教育を与えることをいう。その平和を戦争、災害そして貧困が阻害する。AMDA多国籍医師団は紛争による難民や災害による被災者の救援活動に特化している。

「なぜAMDAは沖縄に注目するのか」。沖縄は日本で唯一の血縁共同体社会であるから。それ故に日本の公共財産である。AMDA多国籍医師団を構成する多くの支部と活動の対象である発展途上国は血縁共同体社会である。真にAMDAが世界平和の実現を願うなら、血縁共同体社会の掟・慣習の熟知が不可欠である。

AMDA沖縄支部は中南米における災害救援活動には必ず医療スタッフを派遣してくれた。一九九八年のハリケーン「ミッチ」、二〇〇一年のエルサルバドル大地震等である。近き他人より遠い親せき。沖縄県系人いる所に災害あれば、必ず医療スタッフを派遣する。否、しなければならない。掟の世界である。

共同体において冠婚葬祭は不文律の慣習である。特に、死者に対する儀礼が崩れる時に共同体は崩壊する。「村八分」。恐ろしい言葉である。存在の無視である。それでも残りの二分、葬式と消火のつながりは残る。

喜びは嫉妬を生む。連帯感はできにくい。しかし、死の悲しみは共有でき、連帯感を確実に生む。沖縄タイムスの紙面構成で大切なのは葬祭に関する紙面である。血縁共同体の厳しい慣習でもある。「困った時はお互い様」の相互扶助の世界も血縁共同体社会においては責務を超えた義理である。必要ときれば必ず行かなければならない。義理欠きは「村八分」への片道切符になる可能性が高い。

医師、救急隊員らを対象に開かれている救急救命医（士）研修プログラム＝2002年10月、ボリビア

「AMDA多国籍医師団は必ず来る」。血縁共同体における伝説にしなければならない。そのためにも、各国におけるキーパーソンが不可欠である。例えば、今年惜しまれつつ亡くなったAMDAボリビア支部長のフォイアニーニ医師。彼は一九九七年に「救急救命医（士）研修プログラム」を開始し、事故現場から病院内まで、外傷患者に対する一貫した初期対応ケア・治療技術の向上に寄与し高い評価を得ている。そして、彼は中南米における災害救援活動には必ずボリビアからチームを派遣してくれた。

AMDA多国籍医師団の伝説化のためのさらなる構想は一カ国につき一つのAMDA支部を確立、一つの医科大学と医療スタッフ派遣協定を結び、現地日本人会が積み立てる緊急救援基金をセットすることである。

今後の課題は引き続き血縁共同体社会における不文律の慣習の学習と経験を重ねることである。沖縄平和賞の受賞により沖縄とパートナーシップを共有する意義と重みをかみしめている。皆様のご理解とご支援をお願いしたい。

AMDA（アジア医師連絡協議会）理事長

この連載は毎月第四日曜日に掲載します。